

いくつかの提言

委員会は、このように類似の事案が繰り返されたことに強い関心を向けてきた。そしていずれの放送でも、本来問題に気づくべき人が、それを適切に認識できていなかったことを確認した。選挙はこれからも繰り返し行われる。こうした事案を二度と引き起こさないためには、一人ひとりがどのように意識を高め、放送局はどのような対策を組織的に講じればよいのだろうか。やや踏み込んだ提言であるが、今回の事案の当事者のみならず、放送業界全体において、選挙に関する放送倫理違反の問題の再発を防ぐために共有してほしい事柄を、以下に記しておきたい。

1 こころの秤（はかり）をイメージしよう

放送に携わる全ての人々が、放送倫理を尊重し遵守することにより、初めて放送の使命は達成され、民主的な社会の実現に寄与することができる。しかしそれは決して容易なことではない。特に放送が選挙の公平・公正性を害することがないようにするためには、さまざまなケースで適切な判断ができるように、選挙についての放送倫理を知識として知るだけでなく、問題になりうることに対する感度を上げていかなければならない。

本意見書の冒頭で、「私たちは誰でも、こころの中に秤を持っている」と書いた。ならば、その秤をイメージすることから始めてみてはどうか。その際に重要なのは、有権者である視聴者の視点にたって、番組内容を客観化することである。秤の皿のひとつに放送しようとしている内容物を載せたとき、秤が視聴者からどのように見えるかを想像すればよい。

放送は実にたくさんの情報を提供する。有権者にとっては、テレビ画面に登場する候補者の一挙一動や肉声のインパクトのほうが、活字よりはるかに大きい。有権者はそれを視聴して、そこから候補者の人格と政策を理解しようとする。活字や写真よりも本人の動く姿のほうが説得力をもつのである。

その姿が、一度皿に載った状態をイメージしてみよう。

仮に、ある候補者の姿だけが放送され、他の候補者の姿が放送されないとしたらどうか。その事実だけで、片方の皿に空白が生じ、有権者のこころの秤は大きく傾くだろう。その結果、一人ひとりの投票結果は、大きくゆがんでしまいかねないのである。特定の候補者のみを映し出すことで、選挙の公平・公正性が損なわれるというのはこのことを意味している。

このように秤が大きく傾く場合には、一旦その候補者を皿から降ろしてみるといい。もし他の映像を用いても同程度に番組の意図が実現できるかどうかを検討するのだ。それでもなお、候補者を皿に載せるべき社会的使命が放送にあると考えるのならば、

それが公平・公正性を損なうものではないという根拠が必要になる。

大切なのは、このように秤をイメージすることで、むしろ積極的に、選挙に関する放送番組を企画・制作・編集・放送する意識を、制作者同士で高めあうことである。その結果、有権者のこころの秤に多様で豊富な情報が提供され、それが自由な判断を助け、真に公平・公正な選挙を支えることになる。これが、本来の民主主義を作り上げることに寄与する、選挙に関する放送倫理の基本的な考え方であろう。

2 組織や陣形を整えよう

しかし本件放送2のように、番組の中には、候補者が出演していると気づかぬうちに放送してしまい、いつのまにか視聴者のこころの秤に特定の立候補者を載せてしまう場合もある。選挙に直接的にはかかわらないテーマや内容、さらには大量の番組の中から、そのような問題を見つけ出すためには、よほどの注意が必要である。ここでミスを犯さないためには、注意すべき情報の共有や、皿の上の姿に気づいた人が問題を指摘しあえる環境づくりが重要になる。

放送にかかわる一人ひとりの、選挙に関する放送倫理の感度が上がり、意識が高まっていくことがもちろん理想である。しかし、すべての人が番組で取り扱われる素材について、十二分な知識や情報を持ったうえで、番組制作に取り組むことは困難である。したがって、個々人の能力だけに頼るのではなく、組織全体で対応すべき課題であろう。

これはチェック体制のことだけを言っているのではない。むしろ制作過程の中でこそ考えるべき課題である。視聴者にわかりやすく情報提供をしようとする場合、制作者は往々にしてその核心を突こうと、前のめりの「攻め」の姿勢に入る。しかしそれは一方で、制作者の視野を狭めてしまい、認識できない事柄を増やすことにもなる。

ここで想起すべきは、どんなジャンルであっても、放送番組は集団で制作されているということ、つまりチーム戦をしているということではないだろうか。誰かが果敢に論点に攻め込もうとしているときには、必ず他の誰かが守りを固めておく必要がある。選挙について視聴者に訴えかけるものを追求するときには、必ず誰かが、公平・公正性の点から問題がないか、守備的に目を光らせておかなければならない。

これはサッカーの組織戦術によく似ている。ことに攻守の緊張感が高まった状況では、選手同士の意思疎通が円滑に行われるように陣形を整え、ここぞというところにスペシャリストを投入して、チーム全体の士気を高め、同時に組織としての視野を広げることが重要になる。豊富で多様な情報が必要な選挙が相手の場合は、特に守備のスペシャリストは重要である。こうした陣形は、日々の基礎的訓練や練習試合を積み重ね、過去の経験を教訓として活かす中で、鍛えられ組み上げられていく。そうして初めて、選挙という特別なビッグ・ゲームの中で、このような組織戦術が機能するこ

とになるだろう。

関西テレビとテレビ熊本の両社とも、問題の発覚後、委員会のヒアリングに先行して、迅速に改善策を打ち出した。

関西テレビは、社内における問題意識の共有と選挙報道ルールの周知徹底にあわせて、「選挙担当プロデューサー」という守備のスペシャリストを起用することを決めた。このポジションは、再びサッカーに例えるなら、ディフェンダーの中でも強力なセンターバックであり、他のメンバーに声を掛け、ミスを見逃さずカバーする役割が期待されている。テレビ熊本では、身近な地方選挙から、全部局のスタッフが選挙情報を共有するための連絡会議を新設した。また、独自の新たな選挙検索システムを導入し、番組プレビューの二重体制を定着させるとしている。

これらの対策が功を奏して、問題が組織の隙間をすり抜けていかない環境が両社に築かれることを期待したい。